

## 論 文

# 読書行為の次元：成人を対象とした フォーカス・グループ・インタビュー\*

國 本 千 裕<sup>\*2</sup>

宮 田 洋 輔<sup>\*3</sup>

小 泉 公 乃<sup>\*4</sup>

金 城 裕 奈<sup>\*5</sup>

上 田 修 一<sup>\*6</sup>

本研究は読書の行為に焦点を当て「読書とはいかなる行為であるのか」を明らかにすることを目的としている。既存の読書研究は、読書の対象や、児童や生徒に対する読書指導といった側面に焦点を当てるものが多かった。これに対して本研究は、個人が行う読書は様々な次元からなる行為であると考え、成人を対象として読書の次元を明らかにしようと試みた。

20代から40代の計29名を対象にフォーカス・グループ・インタビューを5回実施し、発言を分析した結果、読書とは、対象（何を読むのか）に加えて、志向（なぜ・何のために読むのか）、行動（どのように読むのか）、作用（読んだ結果何を得的のか）、場所（どこで読むのか）の五つの次元から成る行為であることが明らかになった。特に対象は、物理的媒体、ジャンル、内容評価といった観点からみられる可能性が示唆された。

## 目 次

## 1. 読書についての先行研究の整理と本研究の課題

- 1.1 最近の研究論文の傾向
- 1.2 読書行為の多様性
- 1.3 研究の目的

## 2. 研究方法

- 2.1 フォーカス・グループ・インタビューの特徴と利点
- 2.2 読書についてのフォーカス・グループ・インタビュー
- 2.3 読書を構成する「要素」と「次元」の分析

## 3. 結果

- 3.1 読書行為を構成する五つの次元
- 3.2 読書行為の次元がもつ階層構造

## 4. 読書行為

- 4.1 読書行為の次元
- 4.2 今後の課題

\* 2009年2月27日受付 2009年8月1日受理

\*<sup>2</sup> くにもと ちひろ 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻

\*<sup>3</sup> みやた ようすけ 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻

\*<sup>4</sup> こいずみ まさのり 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻

\*<sup>5</sup> きんじょう ゆうな 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻

\*<sup>6</sup> うえだ しゅういち 慶應義塾大学文学部

## 1. 読書についての先行研究の整理と本研究の課題

### 1.1 最近の研究論文の傾向

近年、国や学校において読書活動を推進する施策や活動が盛んに行われている。2001年の「子どもの読書活動の推進に関する法律」の施行、2005年の「文字・活字文化振興法」の成立、2008年6月になされた2010年を国民読書年と定めた衆参両議院の「国民読書年に関する決議」と、読書や読むことに関する立法が続いている。1988年に千葉県船橋学園女子高等学校（現・東葉高等学校）から始まった「朝の読書」運動は、平成20年（2008年）末時点で、25,000校以上で実施され<sup>1)</sup>、これは学校教育における読書奨励に対する関心の高さの一例と言える。

こうした読書推進を目的とした施策や活動が活発になる以前から、日本国内には読書に関する文献は数多く存在している。出口一雄は、昭和20年代から40年代までの読書関連書の解題書誌を編纂しており、読書に関連する文献はこの期間だけでも450点に達している<sup>2)</sup>。この量は、国内における読書に対する関心、特に読書に対する啓蒙意欲の強さを反映しているとともに、読書は論じやすいテーマと考えられていることも示している。

読書に関する最近の研究論文の傾向を示すために、国内の読書を扱った研究論文を調査した。まず、国立国会図書館『雑誌記事索引』の「論題名」に「読書」を含むものを検索したところ、出版年1998年から2007年の10年間で3,928件の記事が得られた。ここから、読書の啓蒙記事、解説記事、書評や読書ガイド、随筆などを除き、調査、研究論文のみを選択した結果、223論文となった。

年別の論文数を調査した結果、読書を扱う論文は、年間20から30論文程度に過ぎず、また、増加傾向がみられるわけではない。

国立国会図書館『雑誌記事索引』では、掲載雑誌の国立国会図書館分類記号による検索ができる。先に選択した223論文を、掲載雑誌の分類記号で分類した結果を第1表に示したところ、教育分野の雑誌に掲載された論文が、全体の3分の1と多数を占めた。

さらに、読書を中心においた観点から分類を試みた。和田敦彦は、読書あるいは読書論を問い直すという視点から文学研究、歴史、心理学、教育といった広い範囲の読書関連文献を展望している<sup>3)</sup>。これを念頭におき、第2表のように、各論文を読書特有の観点から分類した。

「教育と発達過程」には幼児や生徒を対象とした読書の調査研究、学校などにおける読書指導に関わる文献が含まれている。2008年に国立国会図書館関西館図書館協力課が公表した『子どもの情報行動に関する調査研究』の中の「子どもの読書に関する教育学的研究」の文献展望では以下のように述べられている。

学校教育の側面から見た場合、「読書」そのものを対象におこなわれている研究は、学校図書館をフィールドとして扱われたものや認知心理学的アプローチのものが大半である。

第1表 掲載雑誌による論文の分類

国立国会図書館分類表	論文数	比率
ZF 教育	80	35.9%
ZU 書誌・図書館・一般年鑑	49	22.0%
ZV 一般学術誌	38	17.0%
ZD 経済	20	9.0%
ZE 社会・労働	12	5.4%
ZA 政治・法律・行政	9	4.0%
ZN 工学	5	2.2%
ZG 歴史・地理	4	1.8%
ZM 科学技術	4	1.8%
ZK 芸術	2	0.9%
計	223	

第2表 論文の分類

分類	論文数	比率
教育と発達過程	70	31.4%
歴史	40	17.9%
文学研究	39	17.5%
障害者支援	18	8.1%
大学生	17	7.6%
技術	14	6.3%
読書一般	11	4.9%
眼球運動視点移動	5	2.2%
その他	9	4.0%
計	223	

学校教育のカリキュラムに深く関連するものは、主に国語科教育との関連が深い<sup>4)</sup>。

今回、集めた文献では、学校図書館をフィールドとするものはわずかしかなく、幼児や低学年の児童では、読書と発達との関連をみた研究と、高校生では読書の実態に関する調査が多かった。また、確かに国語科教育に関連する文献もみられた。

学校教育や読書指導とは別に、比較的調査しやすい大学生を対象とした調査結果がある。これらは、大学生の読書実態を調査した報告である。

歴史や文学研究の分野で読書を取り上げた研究が一定数あった。特定の時代における読者、出版、書籍などを扱った読書史や書物史の研究が活発に行われている。たとえば、青木美智男は、江戸時代の女性の読書の状況を明らかにし<sup>5)</sup>、小池淳一は、近世の北奥羽において、読書や写本ばかりか、書物の所有、贈答も宗教現象の一環として捉えられると指摘している<sup>6)</sup>。読書史においては、読書の行為が扱われ、読書に対する考え方が言及される場合もあるが、直接に現代の読書が取り上げられることはない。また、文学研究においては、作家の読書傾向や読書に対する態度を論じた文献が多数あるが、この場合の主題は作家であって、読書ではない。

読書の技術的手段の改善提案をしたり、実験をしている文献を「技術」としてまとめたが、視覚障害者など読書困難者に対する読書支援装置の開発などの報告はかなり多く、これを別にした。また、読書時の眼球運動や視線移動を調べた一群の研究論文がみられた。表中の「その他」には、読書会、高齢者の読書、読書療法の文献が含まれている。

以上の、教育と発達過程、歴史、文学、技術開発といった領域における読書の調査研究は、読書史と文学研究の一部を除けば、読書の行為自体を取り上げる試みはほとんどみられないと言えよう。

## 1.2 読書行為の多様性

国内の読書の状況と経年変化を表す調査として、毎日新聞社の「読書世論調査」がよく知られている。この調査は、1947年に第1回調査が行

われ、現在まで毎年実施されてきた。本調査において示される「総合読書率」は、「あなたは、書籍や週刊誌、月刊誌を読みますか」という質問に、書籍と雑誌のいずれかを「読む」と回答した人々の割合である<sup>7)</sup>。毎年この「読書世論調査」の結果が公表されると、「読書率」の変化が喧伝され、それが低下すれば社会問題として取り上げられてきた。しかしながら毎日新聞社の「読書世論調査」が扱う読書は、書籍、あるいは雑誌といった媒体を読むという単純化された行為であり、読書に関わるその他の要素は切り捨てられている。また、読書対象という面でも、書籍と雑誌に限定された範囲に留まっている。

「読書率」の低下が社会問題とされる風潮や、読書推進運動への関心の高まりに代表されるように、近年の読書に関する調査研究は、読書の人格形成的な側面、あるいは読書の対象となる書籍のもつ啓蒙的な側面に注目することが多い。このような側面は人間の発達期に関わる部分が多いため、前述のように結果的に調査対象が子供の読書行動や幼少期の読書、すなわち発達過程に限定されるという傾向がみられる<sup>8)</sup>。

人々の読書行為の実際は、こうした読書の対象や、読書のもつ人格形成的な側面だけから捉えられるものではない。読書はより多くの次元によって構成されるということが、さまざまな論者や文献によって示唆されている。たとえば、吉本隆明は、自身の読書にまつわるエッセイと対談をまとめた『読書の方法』を、「読書原論」、「読書体験論」、「読書対象論」の3つの観点から整理している<sup>9)</sup>。読書原論とは、何に向かって読むのか、読書体験論は、どう読んできたのか、読書対象論は、何を讀んだか、何を讀むか、をそれぞれ示している。たとえば世論調査は読書対象論に含まれるであろう。

他にもこの三つの分類だけではくることができない、読書の重要な側面が示されている。たとえば、長田弘は“本を読むときに自分で自分に一番最初にたずねることは、その本をいつどこで読むか、本を読む場所と時間です”<sup>10)</sup>と読書における場所や時間の重要性に言及した。アドラー(Adler, Mortimer J.)とドーレン(Doren, Charles V.)は“「読む」という行為には、いついかなる

場合でも、ある程度、積極性が必要である。完全に受身の読書などありえない<sup>11)</sup>と読書における読者の態度を重視している。また、近年は、読書が仕事術や知的生産術という文脈で取り上げられることも多い。そこでは多読や速読、飛ばし読みが推奨されることもあり<sup>12)</sup>、これまでの読書観とは異なる読書の価値が提示されている。

このように読書という行為は、単純に読書の対象や人格形成的側面からだけでは網羅できない多様性を含んだ行為であることが示されている。読書のもつ多様性を理解することは、読書そのものを研究する場合に必要な不可欠になるだろう。しかし、読書行為が孕む多様性の体系的な整理はなされていない。読書における多様性から読書行為を捉えなおすことは、読書という行為そのものに関する研究を行う際に、重要な基盤となるだろう。

### 1.3 研究の目的

本研究の目的は、こうした読書の多様性に着目した上で、読書という行為を構成する次元と個々の次元の詳細を明らかにすることにある。読書とは何かを明らかにするためには、読書という行為が人々にどのように捉えられているのかを明らかにすることが欠かせない。本研究では読書行為を解明するために、まず個々人がどのような場合に自分の行為を読書と判断しているのか、その詳細を明らかにしようと試みた。

読書を構成する次元としては、既存研究がこれまで着目してきた何を読むのかという読書対象の他にも、様々なものが考えられる。これらの次元を一つ一つ明らかにすることで、読書という行為をより多面的に捉えようとした。

また本研究では、成人の読書に焦点をあてた。その理由をいくつかあげることができる。一つは、既存の読書研究では児童や生徒を対象とし、読書の教育的な側面に着目した研究が多くみられるという指摘があり<sup>13)</sup>、ここでは、まだ十分な研究が行われていない成人の読書の解明を中心においた。第二に、以下で述べる方法を使用する限り、成人を対象としなければ、多様な意見を得ることが難しいと考えられた。第三に、読書行為について年代による相違を見出すことができないかと考えた。

さらに、これまで焦点となってきた読書対象についてより広範囲な視点から捉えようと試みた。既存の読書研究においては、読書対象は本やマンガ、雑誌といった紙の媒体が主に取り上げられているが、ここではこうしたメディアの区分や媒体等を前提とせず、読み手が「読む対象」として捉えたものを幅広く拾い上げた。

## 2. 研究方法

### 2.1 フォーカス・グループ・インタビューの特徴と利点

読書という行為の構成面を明らかにするために、成人男女の「読書」の捉え方を探るフォーカス・グループ・インタビューを行った。フォーカス・グループ・インタビューは“ある特定のトピックについて選ばれた複数の個人によって行われる形式ばらない議論のこと”<sup>14)</sup>と定義されている。ある特定のトピックについて、同様な性質や経験を持つ参加者を集め、参加者同士に意見交換してもらう集団討議の形式をとるインタビュー方法である。フォーカス・グループ・インタビューの父と呼ばれるマートン (Merton, Robert K.) は、フォーカス・グループ・インタビューは、第一に、参加者の具体的な経験 (映画を見る, ラジオを聞くなど) を調べることに、そして第二に、繰り返される一般的な経験に対する反応を収集することに役立つと述べている<sup>15)</sup>。

フォーカス・グループ・インタビューを採用することの最大の利点は、参加者同士が互いの発言に刺激を受け、相乗効果で意見に大きな広がりが見られる点にある。調査者ではなく参加者主導で進められる集団討議であるために、特定の「経験」に対する人々の感じ方や考えを、既成概念に依らずに幅広く収集できるという利点もある。このため、本調査のような「人々は読書をどのように捉えているか」といった探索的な課題の調査に適した手法である<sup>16)</sup>。

フォーカス・グループ・インタビューは、欧米の図書館情報学の分野においては、1980年代初頭にカスキー (Kaske, Neal K.) らが研究手法として用いたのを皮切りに<sup>17)</sup>、これまでも公共図書館や大学図書館の管理運営方針の決定やサー

ビスの評価など、広く調査に利用されてきた。初期には量的調査と併用して用いられたものの、現在では独立した質的調査の一手法として確立されつつあるとされる<sup>18)</sup>。国内では近年になってフォーカス・グループ・インタビューに対する関心が増しつつあり<sup>19)</sup>、いくつか調査事例の報告がみられるようになった<sup>20)</sup>。大学図書館の利用者調査の一環として簡略化したフォーカス・グループ・インタビューが用いられたこともある<sup>21)</sup>。

フォーカス・グループ・インタビューを成功させるには、1) インタビューの目的と焦点の明確化、2) 同質かつ適切な人数での集団の構成、3) 意見交換を円滑にするための司会者による適切な導入と介入、4) 会場の座席の配置や雰囲気への配慮、といった準備や進行において重点的に考慮すべき点が幾つか存在する。以上のような点を踏まえて調査設計とグループ構成を行った。

## 2.2 読書についてのフォーカス・グループ・インタビュー

フォーカス・グループ・インタビューの参加者は、公募や紹介によって集めた読書を好む成人29名であり、平均年齢は29.4歳である。読書の捉え方を探索するという調査目的に沿って、日常的に読書をする人々を対象とした。ただし、対象者の選択にあたり、読書の量や頻度などの基準は設けなかった。

参加者のうち大学生については、学内のアルバイト掲示板に案内を掲示して公募した。社会人については調査者の知人(会社員)を介したスノーボール方式で求人を行った。公募に際し、掲示物や電子メールには“読書が好き、読書が趣味と思う方なら、どなたでも大歓迎です。読書の量、読む対象、ジャンルなどは一切問いません”との文面を掲載した。

フォーカス・グループ・インタビューでは、“参加者の背景、人口統計的、社会文化的特徴に関しては、同質の選抜を行う”<sup>22)</sup>ことが推奨されている。そこで、各回のグループ・インタビューの参加者は、大まかに20歳代、30歳代、40歳代と、年代によってグループ化した。これは、同年代を集めることで、グループ・インタビューを円滑に行うための措置である。また同様の措置とし

て、学生のみグループを設けたが、社会人の場合にはグループ化の際、職業は考慮しなかった。性別は考慮していないが、結果としては全体で男14名、女15名とほぼ同数となった。

各グループは、第3表に示したとおりそれぞれ6名程度からなり、計5回のフォーカス・グループ・インタビューを実施した。2008年5月から7月にかけて、各回1時間半程度かけて行った。実施した全5回のフォーカス・グループ・インタビューのうち、第1回目は実質的なプレインタビューとして実施された。最終的に第1回目のインタビューの内容も十分分析に耐えるものであったため、本調査の分析対象としている。

インタビューでは、1) 最初に司会者から参加者に対して簡単な自己紹介(名前と読書の嗜好など)を求めた。2) 次に参加者自身の日常的な読書について「普段どのようなものをどのように読書しているか教えて下さい」と発言を促し、互いの発言に対する意見を求めた。参加者同士での議論が活発化した段階で、3) 読書の捉え方(では自分にとって読書とはどのようなものだと思うか)についてさらに話し合いを求めた。

前述したとおり、フォーカス・グループ・インタビューでは参加者同士の意見交換が最重要視される。今回の場合司会者は、1) 最初の議論のきっかけ、2) 議論が「読書」から逸脱した場合、3) 発言が特定の参加者に集中した場合を除いて、基本的には参加者同士の議論には介入していない。

インタビュー中は、参加者に許可を得てインタビュー全体を録音・録画した。フォーカス・グループ・インタビューは集団討議のため、複数人が一度に発言を行う場面が多々生じる。録画記録は、書き起こしの際、音声だけで発言者が特定できなかった場合に、これを確認するために利用した。

第3表 参加者の一覧

グループ	人数	男	女	平均年齢	属性
1	7	6	1	23.2	学生
2	5	2	3	21.4	学生
3	6	2	4	32.2	社会人
4	5	1	4	46.4	社会人
5	6	3	3	26.2	社会人
全体	29	14	15	29.4	

録音と録画の記録を元に、フォーカス・グループ・インタビューでの全ての発言を書き起こし、調査者の1名がコーディングを行った。この過程では、はじめに発言を文に分けた。次にその中から広く読書の定義に関わる発言を抜き出し、文脈を保存しつつ、発言中の重要語句を抜き出した。

## 2.3 読書を構成する「要素」と「次元」の分析

### 2.3.1 「要素」の抽出

インタビューをすべて書き起こした結果、計3,329件の発言を得た。この3,329件は、書き起こした発言を文に分け、広く読書の定義に関わる発言と発言中の重要語句を抜き出したものの総数である。この中から調査者の1名が読書に対する捉え方や読み方について述べている部分を抜き出した。たとえば「○○を読書とみなす」「○○する場合は読書とみなさない」など、ある行為を「読書とみなすか否か」に関して述べた発言がこれに該当する。

第1図に示したのは、この作業によって実際に抽出した発言の例である。次に、それぞれの発言において、読み手が読書か否かを判断するとき最も影響を与えたものは何かを検討した。たとえば発言Aにおいては下線部の「体裁の整っている本」が、発言Bにおいては下線部の「新聞」が、発言Cにおいては下線部の「ブログやホームページ」が、読書か否かの判断を左右している。

A: ある程度形の、 <u>体裁の整っている本</u> っていうのを読むのが読書だなんて思う →要素：書籍
B: 確かに <u>新聞</u> 、読書って言われて、 新聞はあまり思い浮かばない →要素：新聞
C: インターネットで色々、 <u>ブログを見たり、 ホームページを読んだり</u> 、まあ、 ニュースを見たりしていますけれども、 やはりそれは（中略）読書ではなくて、 情報収集というか →要素：インターネット

第1図 分析対象となった発言

こうして見出した部分には、その内容を端的に表すキーワードを付与した。発言Aの下線部ならば「書籍」、発言Bの下線部ならば「新聞」、発言Cの下線部ならば「インターネット」のキーワードを付与した。

ここで付与したキーワードは、人がある行為を読書とみなすか否かを定める直接的な要因であり、読書という行為を構成する最も基本的な構成要素とみなすことができる。ここでは、このキーワードを「要素」と呼び、分析の最少単位とした。同一要素に対して、同一人物が複数回言及していた場合にはこれを重複として削除したところ、要素に対する参加者の述べ言及件数は全体で190件あった。今回の調査ではこの190件を対象に分析を行った。

### 2.3.2 「要素」の集約と「次元」

分析の結果、いくつかの要素は集約することが可能であり、階層関係をもつことが分かった。たとえば、第1図では、書籍、新聞、インターネットの3種類の要素が存在している。このうち書籍と新聞は同じ「紙媒体」であり、これに対してインターネットは「電子媒体」とすることができる。従って、3種類の要素は「紙媒体」と「電子媒体」の2つの要素集合に集約できた。さらにここで集約した「紙媒体」と「電子媒体」は、いずれも「どのような物理的な媒体を読むのか」に関わる部分である。「紙媒体」と「電子媒体」の2つの集合には、上位概念として「物理的な媒体」があると考えられ、ここに階層関係が存在することが認められる。

このような要素の集合を互いに比較して、それらを統合しうる上位の概念がないかを検討した。こうした階層関係は、要素によっては数段階に及ぶ複雑な構造になる場合もあり、こうした構造が全く生じない場合もあった。

ここまでの一連の分析過程を第2図に示した。分析は、1) 読書に関する発言を抽出する、2) 読書か否かを決定している要素を見出して要素名を付与する、3) 要素同士を集約して階層関係を見出す、という三段階の作業によって行われている。本研究では、こうした作業の結果、階層関係の最上位に見出された概念を読書の「次元」とし、さ

らに「次元」の下位にある概念を「サブ次元」と呼ぶことにする。

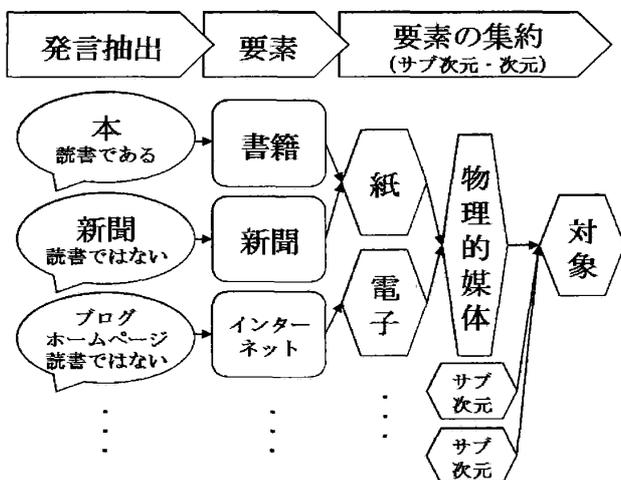
こうした要素の集約と階層関係の分析を、フォーカス・グループ・インタビューが1回終了するごとに行った。フォーカス・グループ・インタビューを実施し、新たなデータが加わるたびに全体の階層関係を見直した。一連の分析作業は調査者4名が行い、各回に各自の分析結果を持ち寄って全員で討議した。

### 3. 結果

#### 3.1 読書行為を構成する五つの次元

分析の結果、読書という行為は、1) 読書の対象、2) 読書への志向、3) 読書時の行動、4) 読書の作用、5) 読書する場所の五つの次元から成ることが分かった。第4表に上記の五つの次元に対する参加者の言及件数を次元ごとに分けて示した。

分析対象となった発言190件のうち、読書の



第2図 分析の過程

第4表 各次元への言及件数

次元	言及件数
対象	116
志向	23
行動	20
作用	18
場所	13
計	190

「対象」に関する言及は116件と多い。このことから「対象」は読書を構成する次元として、最も注目されていることが分かる。「志向」への言及は190件中23件、「行動」への言及は20件、「作用」への言及は18件、「場所」への言及は13件であった。「対象」に比べるとこれらの次元に対する注目度はやや低かった。

以下では言及数が多かった次元から順に、五つの次元について説明する。各次元にどのような要素が含まれ、各次元がいかなる階層、すなわちサブ次元を持つのかを示した。

なお文中で引用する発言には発言者の識別番号を付与した。識別番号は、発言者が出席したインタビューの開催回(数字)と、個人を特定するためのアルファベットから成っている。たとえば第1回目のフォーカス・グループ・インタビューに参加したある参加者は「1A」、同じく第1回に参加した別の参加者は「1B」というかたちで引用文の文末に番号を表記した。

#### 3.1.1 読書の対象

最も言及が多かった第一の次元は「対象」である。人がある行為を読書とみなすには「何を読むのか」が影響していた。第一の次元「対象」について詳しく分析した結果、「対象」は先に触れた毎日新聞社の「読書世論調査」に代表されるような<sup>23)</sup>、書籍、雑誌、新聞といった単純な分け方ではなく、第5表のような、1) どのような物理的媒体を読むのか(「物理的媒体」)、2) どのようなジャンルを読むのか(「ジャンル」)、3) 内容のどの点を評価して読むのか(「内容評価」といった三つのサブ次元(サブ次元1)に分けることが

第5表 読書の「対象」のサブ次元

次元	サブ次元1	サブ次元2
対象	物理的媒体	紙 電子
	ジャンル	文字主体 絵主体
	内容評価	ストーリー 主題/主張 持続性

可能であった。さらに、次元「対象」は、これらサブ次元の下位に更なるサブ次元（サブ次元2）を有していた。

以下では、上記第5表のサブ次元1、すなわち「物理的媒体」「ジャンル」「内容評価」の各々について、その下位にあるサブ次元2と、そこに含まれる要素の詳細を説明していく。

フォーカス・グループ・インタビューの結果からは、読書の捉え方にどのような「物理的媒体」を読むのかが関わるようになった。“ある程度形の、体裁の整っている本っていうのを読むのが読書だと思って思う”（1G）という発言や“PDFも読書じゃない（中略）本の形をして、こう手で開いて読むっていうのが、自分の中では読書”（2D）といった発言は、読む対象がどのような物理的媒体であるかによって、「読書とみなすか否か」の判断が変わることを示している。

第6表に示したのは、今回の調査においてあげられた「物理的媒体」の要素の一覧である。書籍、雑誌、新聞、手紙などがあげられている。電子媒体としては、容易にその内容を改変できるインターネット（ブログやウェブサイトなど）、内容を改変するのが難しいPDF、そのほか、電子ブック、iPod、携帯電話、ニンテンドーDSなどがあげられていた。

上記の要素区分にもみられるように、一部の読み手は媒体の可変性や形態に着目していた。たとえば“インターネット上のものとかは（中略）後で手を加えられる、いくらでも手を加えられるのは読書ではない”（1A）といった発言がみられた。

第6表 「物理的媒体」の要素

次元	サブ次元1	サブ次元2	要素
対象	物理的媒体	紙	書籍 雑誌 新聞 手紙
		電子	インターネット（可変） PDF（不変） 電子ブック iPod 携帯電話 ニンテンドーDS

ある参加者が“どんな立派な内容が書いてあってもパソコンで読んだりするのは読書ではない”（2A）と発言したように、読む媒体が「紙」媒体なのか「電子」媒体なのかにも着目する傾向がみられた。しかし、どのような物理的媒体ならば、それを読むことを読書とみなすのかについては、意見が異なった。

「物理的媒体」に加えて、「ジャンル」すなわち読書対象がどのような内容であるかも読書の捉え方に影響していた。たとえば“実用書は僕の中ではどちらかというと読書じゃない”（5C），“雑誌論文だとやや自分の中での読書度は低い”（1E）といった発言や，“絵本として完成されているものは、絵も読まなくちゃいけないから（読書である）”（4B）といった発言からは、読む対象がどのような内容であるかによって「読書とみなすか否か」の判断を行う参加者がいることが伺える。

フォーカス・グループ・インタビューであがった「ジャンル」の内容を第7表に示した。小説、論文、ビジネス書などや、マンガ、絵本、図鑑などがあげられている。これらのジャンルは「文字主体」のジャンルと「絵主体」のジャンルの大きく二種類に分けられたが、“文字がそんなに重点的に扱われていないと、読書っていう感じがしないですね”（2D）という発言がある一方で、“キリスト教絵画とかの図像学的解釈うんぬんみたいな

第7表 「ジャンル」の要素

次元	サブ次元1	サブ次元2	要素
対象	ジャンル	文字主体	小説 論文 ビジネス書 実用書 エッセイ 日記・闘病記 書評 教科書 ノンフィクション ノバライズ（映画等） 対談
		絵主体	マンガ 絵本 図鑑 絵画 ファッション雑誌

(中略) 本当に絵しかない本を読むのは、読書ですよ(2A)と述べた例もあった。「文字主体」、「絵主体」のいずれの内容種別であっても、人によっては読書とみなされており、両者の間に差異や一定の傾向はみられなかった。

「物理的媒体」や「ジャンル」に加えて、「内容評価」も読書の捉え方に影響を与えていた。「内容評価」は、ある「対象」の有する内容の、どの点を評価した上で、これを読むことを読書とみなしたのかに焦点を当てている。

たとえば、浦沢直樹の『20世紀少年』というマンガのストーリーを例にあげながら、“(マンガというジャンルの中でも)『20世紀少年』とか、あれは結構なんか読書って中に入るのかなって思います(中略)重厚感とか、重さとか(があるから)”(3E)と述べた例があった。ここでは、ストーリーのもつ重々しさが読書とみなす上で重要とされている。他にも“内容に一貫性がある、何らかの形で完結してるものが読書”(1F)であるとする例や、“作品としての完成度が高い”(5C)あるいは“自分の人生では経験できないようなことを、本を読むことによって擬似的に(中略)知ったり”(5E)できるものならば読書とみなす、という発言がみられた。こうした発言は、主に内容のストーリーに関わる評価である。ストーリーに重厚感が感じられるか、ストーリーに一貫性があるか、ストーリーが作りこまれて完成度が高いものになっているか、といった点が読書とみなすか否かの判断に影響を及ぼしていた。

内容の「主題/主張」の有無が影響を及ぼす場合もあった。“テーマでもなんでもいいんですけど、そういうのがちゃんとあるものじゃないと読書対象にならない”(1F)、“(主張が無くて)おもしろいキーワードだけ寄せ集めて”(3B)いるものを読む場合は、これは単なる情報収集であり読書とみなせない、といった発言がその具体例である。

内容が「時間が経過しても価値あるものか」どうかを評価する視点もあった。雑誌の時事的な内容を例にとりながら、“雑誌とかは(中略)1,2週間経ったらどうでもいいことばかり書いてある(ので)読むって認識では見てない”(1F)という発言があった。また、携帯小説の内容を例に

とりあげて、“一つヒットしたらあと似たようなのがばーって乱立しちゃ(中略)一過性のようなもの”(3B)これについては読書とはみなせないと述べた例もあった。ここでは、時を越えて価値の持続する内容をもつかどうか判断に関わっていることが示されている。

これらの「内容評価」の一覧を第8表にまとめた。対象の内容を読み、どのようなストーリーを有しているのか、明確な主題や主張はあるか、内容に持続的な価値はあるか、といった複数の面から評価を行った上で、その対象を「読書とみなすか否か」の判断がなされていた。

第一の次元「対象」について詳しく分析した結果、「対象」は、1)物理的媒体、2)ジャンル、3)内容評価の三つのサブ次元と、その下位にさらに七つのサブ次元を有する、複雑な構造を持つ次元であることが明らかとなった。

### 3.1.2 読書への志向

第二の次元は「志向」である。ある行為を読書とみなすか否かには、なぜ、何のために、何を目指して読書するのか、といった読書をする背景や目的が関係していた。ものを読むときの背景によって、人はその行為を読書とみなしたり、みなさなかったりする。“その記事に興味があって読むんだったらそれは読書かなって思います”(1A)、“迫られてしょうがなく読んで(その場合は読書ではないと思う)”(1D)などが典型的な発言である。また特定の目的と読書を結びつけて捉えている発言も目立った。たとえば“(読書とは)知的好奇心とかを満たしたり、あとは教養

第8表 「内容評価」の要素

次元	サブ次元1	サブ次元2	要素
対象	内容評価	ストーリー	重厚感 一貫性 作り込み/完成度 疑似体験 ドラマチック
		主題/主張	主題/主張が明確 単なる情報
		持続性	時間経過後の価値

を高める行為” (2D) である, あるいは“読書の目的としてそのいろんな分野でいろんな知識を広げていくっていうのがある” (2E) などの例がこの典型である。

第9表のとおり, 「背景」としては義務感 (勉強のため, 仕事のため), 興味, 読書に対する羨望や, 期限などの切迫があった。他者から何らかのかたちで読書を強いられた場合や, 時間に追われて何かを読まなければならない場合, たとえば“会社からこれ読めよと (言われて) (中略) プレゼンテーション作るのにこれ読まなきゃいけない” (3A) ような場合には, この行為を読書とみなさない傾向が見られた。

読書の「目的」としては, 本を読むことで何かを得られるかもしれないという期待のため, 知識・教養を得るため, 好奇心を満たすため, などがあつた。こうした発言者は読書とは何かを取り入れる行為であると捉えており, こうした目的を持たずに読む場合は“物理的に本は読んでるけど, なんかその本を読む目的としては, まあ, あんまり読書じゃない” (2E) と述べていた。これらの結果から, 第三の次元「志向」は, その下位にサブ次元が二つある一階層の次元とした。

### 3.1.3 読書時の行動

分析から見出された第三の次元は「行動」である。ある行為を読書とみなすか否かについて, 身体的な行為と心的な活動が影響を及ぼしていた。

人が何かを読むときに“手で開いて読む” (2D) あるいは“線を引く” (5D) つまり本に書き込むなど, 身体的な行為を基礎に, 自らの行動を読書

とみなすか否かの判断を行っていた。たとえば, 本に書き込みをする場合は読書とみなす。また, パソコンの画面や携帯電話の画面を読んでいる場合は, 手で開いたり, 書き込みをしたりできないために読書とはみなさない, というものである。このように, 身体的な行為によって, 自らの行動を読書とみなすか否かの判断を行なっているのである。ここから, 「書き込み」, 「手で開く」を要素とし, それらを統合する「身体的」をサブ次元とした。

一方, 身体的な行為とは別に, “行間を読む” (5A), “積極的に読む” (2E), “しっかり読む” (4E), “(読む) 努力をする” (2E), あるいは“(あえて) 時間を作って読む” (3B) といった心的活動が生じたか否かによって, その行為を読書とみなす例がみられた。つまり, 身体的な行為だけでなく, 心的な活動によっても, 読書とみなすか否かの判断がなされていた。ここから, 心的な活動としてあつた「時間をつくる」, 「頭を使う」を要素とし, それらの要素を統合する「心的」をサブ次元とした。

以上より, ある行為を読書とみなすか否かには, 「身体的」な行為と「心的」な活動という, 二種類のサブ次元が存在していたことがわかった。そして, これら二種類のサブ次元を統合する次元として「行動」を設定した (第10表)。

### 3.1.4 読書の作用

第四の次元は「作用」である。ある行為を読書であるか否か判断するには「読んだ結果として何を得るのか」が影響を及ぼしていた。“読んで感動するっていうか, 心が動くものが読書だというふうに思っている” (5C) あるいは“読んで考えさせられるっていうのを考えると (中略) 読書じゃないかな” (1C) といった発言から, こうした

第9表 読書への「志向」の要素

次元	サブ次元	要素
志向	背景	義務 (勉強・仕事) 興味 羨望 切迫
	目的	何かを期待して 知識・教養 好奇心 時間潰し 情報収集

第10表 読書時の「行動」の要素

次元	サブ次元	要素
行動	身体的	書き込み 手で開く
	心的	時間を作る 頭を使う

読書の結果を重視する傾向を読み取ることができた。

「作用」の一覧を第11表に示した。読んだ結果として、第11表に示したような何らかの作用を得られれば、それを読書とみなす傾向が強い。「楽しみ・娯楽」に関する典型的な発言は“読む人がそれで楽しめてれば、読書かなとは思いますが” (1B) である。「時間・世界の共有」とは、たとえば旅行記を読んで“その土地のこととか、文章によってなんかそこの匂いとか、空気とかを感じる” (5E) が該当する。「価値観の吸収」とは“文字の羅列によって得られる、他人の価値観を取り入れる行為” (5F) のことである。

一方、“なにも特別感じもしない” (1F) など、作用が何も生じなかった場合には、その行為は読書とみなされない。「作用」に関してはこれまでに示してきた次元とは異なり、その下位にサブ次元は見られなかった。

### 3.1.5 読書する場所

第五の次元は「場所」である。人がある行為を読書とみなすとき「どこで」読むのが影響を与えることがあった。通学途中に電車でものを読む場合には“あんま読書っていう気はしない” (1D) という発言があった。椅子の上で読むと“椅子の上っていうのがなんか勉強って感じしちゃう” (1D) ために、椅子で読む場合には読書ではないとし、ベッドの上で、夜中に読むのが読書だと答えた例がある。第12表に言及された「場所」を示した。

「家」についての発言では“家で本当に集中できる環境を作って読む” (2B) といった発言があった。「喫茶店」については“読むのは喫茶店と

かが多くて” (2C) という参加者もいれば、“ドトールとかで (本を読むのは) 嫌じゃないですか” (5F) といった正反対の発言もみられた。「電車」に関しては、電車で遠方へ行くときこそ読書のチャンスとする者がいる一方で、電車は周囲の目が気になると敬遠する発言もあった。なかには“状況 (場所) は別に問わないですよ” (1F) という発言もあり、特定の場所で読むことがすなわち読書である、というような傾向は見出せなかった。

全体に「場所」は時間との関係が強いという特徴があった。たとえば、「電車」ならば通勤時間と、「ベッド」ならば就寝前の時間と、「喫茶店」ならば自由時間と結びつく傾向がある。

### 3.2 読書行為の次元がもつ階層構造

こうした分析の結果、人がある行為を読書とみなすには、第13表に示した五つの次元が大きく関わりとえられる。1) 対象は「何を読むのか」に関する次元である。2) 志向はあるものを「なぜ・何のために読むのか」という読書する理由に関連した次元である。3) 行動は人があるものを身体的・心的に「どのように読むのか」についての次元である。4) 作用はあるものを「読んだ結果何を得的のか」に関連する次元である。5) 場所はあるものを「どこで読むのか」に関する次元である。

第12表 読書する「場所」の要素

次元	要素
場所	家 喫茶店 電車 状況は問わない ベッド 心地良い環境

第11表 読書の「作用」の要素

次元	要素
作用	楽しみ・娯楽 時間・世界の共有 価値観の吸収 感動 心に響く なにも感じない 引き込まれる 考えさせられる

第13表 五つの次元

次元	読書を成り立たせるもの
対象	何を読むのか
志向	なぜ・何のために読むのか
行動	どのように読むのか
作用	読んだ結果何を得的のか
場所	どこで読むのか

第3図は読書という行為を構成する五つの次元とサブ次元の全体像であり、フォーカス・グループ・インタビューの分析から得られた読書行為の次元とその構造を示している。分析の過程で、前述した五つの次元は、それぞれが第3図のような階層構造を有していた。特に読書の「対象」は、三階層にわたる非常に複雑な構造を有する。これに対して「作用」や「場所」といった次元は一階層の単純な構造であった。

上述した五つの次元は互いに独立し、次元間に階層関係はない。次元同士が相互に関係している可能性や、それぞれが互いに影響を及ぼし合っている可能性も考えられるが、ここでの分析結果からは関係づけに至っていない。

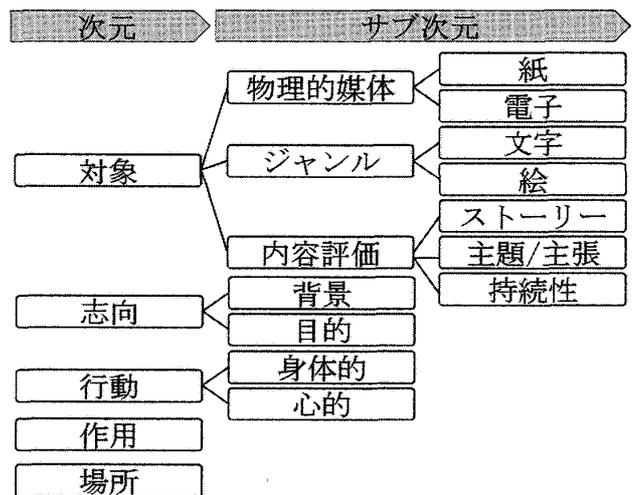
## 4. 読書行為

### 4.1 読書行為の次元

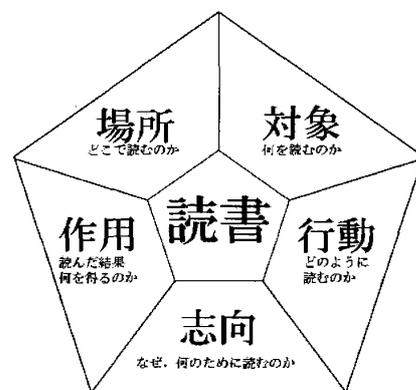
フォーカス・グループ・インタビューにおける参加者の読書行為にかかわる発言を分析した結果、導出された五つの次元を抽象化したものが第4図である。

ここではフォーカス・グループ・インタビューにおける参加者の発言を参照しながら、各次元が指示する内容を記述的に表現した。すなわち、人々は「何を読むのか（対象）」、「どのように読むのか（行動）」、「なぜ、何のために読むのか（志向）」、「読んだ結果何をj得るのか（作用）」、「どこで読むのか（場所）」を考慮して、読書か読書でないかを決めていると考えられる。

フォーカス・グループ・インタビューでは、同じ対象を読む場合、たとえば専門書を読む場合において、間違いなく読書であるとする発言もあれば、仕事や課題といった受動的な態度や漠然とした目的のもとであれば、それは読書とみなさないとする発言もみられた。後者のような意見は、本や雑誌などの物理的な媒体を読むことを読書の前提としている、各種の世論調査では現れることはない。このように、既存研究であまり扱われてこなかった「対象」以外の側面に着目し、「志向」「行動」「作用」「場所」といった、「対象」以外の四つの次元を明らかにした。個々人は「読書」という行為を、「何を読むのか」だけでなく、なぜ、



第3図 読書を構成する次元



第4図 読書行為の次元の概念図

何のために、どのように読むのか、読んだ結果、何をj得るのか、そしてどこで読むのか、までを幅広く含む行為として捉えている。少なくとも、「本を読むこと」が「読書」であるという捉え方はしていない場合が多いことが確認された。

### 4.2 今後の課題

同年代の読書を好む人々を集めてフォーカス・グループ・インタビューを行ったところ、参加者同士が活発に意見交換を行い、その意見に広がりが見られた。フォーカス・グループ・インタビューは、相互作用によって、参加者自身がこれまで潜在的に意識していた考えを自然に引き出し、顕在化するという特色と利点がある。今回の調査で、参加者の「読書」に対する捉え方を多面的に引き出す上で、フォーカス・グループ・インタビューという手法は有効であったといえる。

20代から40代までの読書の捉え方を分析した結果、特定の年代に共通する読書観を見出すことはできなかった。つまりある年齢層は「対象」次元よりも「作用」次元に重点を置いているといった傾向は見られていない。さらに参加者を増やして、読書の次元という観点から分析すれば、年齢層や世代による読書観の違いを発見する可能性は残る。けれども、ここであげられた読書行為の次元は、世代を超えた共通性がある可能性のほうが強いと言えよう。

フォーカス・グループ・インタビューの発言中には、次元間の関係が示唆される発言も存在したが、今回の分析ではそれらの次元間の関係を提示することはできなかった。こうした次元間の関係、つまり「行動」と「志向」、「志向」と「作用」など、次元間の相互関係や構造を明らかにすることが今後の研究課題となるだろう。

## 謝 辞

研究課題の設定から、調査の実施、分析と解釈にいたる全過程において、適切な助言を頂いた、慶應義塾大学文学部の倉田敬子氏、駿河台大学文化情報学部の石田栄美氏、慶應義塾大学大学院の汐崎順子氏、名古屋大学附属図書館研究開発室の三根慎二氏に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 朝の読書推進協議会。「朝の読書」の実施状況。  
[http://www1.e-hon.ne.jp/content/asadoku\\_bunseki.html](http://www1.e-hon.ne.jp/content/asadoku_bunseki.html), (参照 2009-01-09)
- 2) 出口一雄『読書論の系譜』ゆまに書房, 1994, 402 p.
- 3) 和田敦彦『メディアの中の読者』ひつじ書房, 2002, 267 p.
- 4) 国立国会図書館『子どもの情報行動に関する調査研究』国立国会図書館関西館図書館協力課, 2008, 169 p. [http://current.ndl.go.jp/files/report/no10/lis\\_rr\\_10.pdf](http://current.ndl.go.jp/files/report/no10/lis_rr_10.pdf), (参照 2009-01-09)
- 5) 青木美智男「人情本にみる江戸庶民女性の読書と教養—為永春水『梅暦』シリーズを素材に」『歴史評論』No. 694, 2007.2, p. 25-38.
- 6) 小池淳一「宗教現象としての読書—蔵書という儀礼・書写という実践」『歴史評論』No. 629, 2002.9, p. 27-36.
- 7) 毎日新聞社編『読書世論調査 30年：戦後日本人の心の軌跡』毎日新聞社, 1977, 319 p.
- 8) 秋田喜代美「小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響」『発達心理学』Vol. 3, No. 2, 2001.12, p. 90-98.
- 9) 吉本隆明『読書の方法—なにを, どう読むか』光文社, 2001, 349 p.
- 10) 長田弘『読書からはじまる』日本放送出版協会, 2001, 201 p.
- 11) Adler, Mortimer J. and Doren, Charles V. 『本を読む本』[*How to Read a Book*] 外山滋比古, 槇未知子訳, 講談社, 1997, 265 p.
- 12) 本田直之『レバレッジ・リーディング』東洋経済新報社, 2006, 171 p.
- 13) 財団法人日本経済研究所. 平成 16 年度文部科学省委託事業図書館の情報拠点化に関する調査研究：親と子の読書活動等に関する調査。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/tosho/houkoku/05111601.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05111601.htm), (参照 2009-01-06)
- 14) Beck, L.C., Trombetta, W. L., Share, S. "Using focus group sessions before decisions are made" *North Carolina Medical Journal*. Vol. 47, No. 2, 1986, p. 73-74.
- 15) Merton, Robert K. "The focused interview and focus group: Continuities and discontinuities" *Public Opinion Quarterly*. Vol. 51, No. 4, 1987, p. 550-556.
- 16) Vaughn, Sharon., Schumm, Jeanne S., Sina gub, Jane M. 『グループ・インタビューの技法』[*Focus Group Interviews in Education and Psychology*] 井下理監訳, 慶應義塾大学出版会, 1999, 215 p.
- 17) Kaske, Neal K. and Sanders, Nancy P. "On-line subject access: The human side of the problem" *RQ20*. Vol. 53, No. 1, 1980, p. 52-58.
- 18) Drabenstott, Karen M. "Focused group interviews" *Qualitative Research in Information Management*. Glazier, Jack D. and Powell, Ronald R. eds. Libraries Unlimited, 1992, p. 85-96.
- 19) 長谷川豊祐, 汐崎順子, 渡辺剛行「第 6 回調査手法としてのフォーカス・グループ・インタビューの理論と実際講演記録」『エビデンスベーストアプローチによる図書館情報学研究の確立科学研究費研究成果報告書』2008, p. 149-170.
- 20) たとえば, 汐崎順子による「読書意欲・読書習慣の形成過程—子ども時代の読書を中心に」『三田図書館・情報学会研究大会発表論文集』2008, p. 21-24. においてフォーカス・グループ・インタビューが用いられている。ほかにも, 長谷川豊祐「フォーカス・グループ・インタビューによる大学図書館業務電算化の構造解明」『三田図書館・情報学会研究大会発表論文集』2006, p. 17-20. あるいは, 石原眞理「レファレンス・サービスの品質評価の枠組みと評価法—公共図書館を中心に—」『三田図書館・情報学会研究大会発表論文集』2007, p. 73-76. などの例があげら

- れる。 2008.6, p. 278-284.  
21) 上岡真紀子「慶應義塾大学における利用者調査の事例」『情報の科学と技術』Vol. 58, No. 6, 22) 前掲16)  
23) 前掲7)

## Dimensions of Reading: Findings from a Focus Group Interview to Adults

Chihiro KUNIMOTO

*Graduate School of Library and Information Science, Keio University*

Yosuke MIYATA

*Graduate School of Library and Information Science, Keio University*

Masanori KOIZUMI

*Graduate School of Library and Information Science, Keio University*

Yuna KINJO

*Graduate School of Library and Information Science, Keio University*

Shuichi UEDA

*Faculty of Letters, Keio University*

This article attempts to characterize “reading (*dokusho*)” as an action. A large number of studies have focused on one aspect of “reading”, such as the reading guidance for students or the reading materials. This research works from a slightly different approach. The focus of this research is what the adult considers “reading” to be. This article regards “reading” as more complex action for the adult.

Twenty-nine people were recruited to conduct 5 focus group interviews. The participants were all in their 20s, 30s, and 40s. Focus group sessions allowed for identifying the concept of “reading” for the adult. This paper suggests that reading action was constructed with 5 dimensions. 1) Objects; What they read, 2) Backgrounds and goals; Why and for what they read, 3) Action; How they read, 4) Effects; How they are influenced after reading, 5) Place; Where they read. It must be emphasized that “Objects” could be recognized as more complicated dimensions in this paper. The dimension consisted of following 3 parts; 1) Physical materials, 2) Genres, 3) Values of the contents.